

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。
このシリーズは今号が最終回。
次号からは別の筆者による連載が始まります。

をちこち散歩

@Kosovo

戦ミ 後のト ロロ ヴィ ツ ア、 の光景

コ

ソヴォのミトロロヴィツアでわたしは多くのものをみた。

破壊されたセルビア人墓地の跡。焼討ちにあったアルバニア系住民の家屋。張りめぐらされた鉄条網の向こうで雑談をしているNATO軍兵士たち。急ごしらえの屋台と露店。町は橋を境界に完全に二

つの民族に分断されていた。それはわたしが初めて目にした「戦後」の光景だった。1947年の東京とはひよっとしてこんな風だったのだろうか、わたしは想像していた。だが困難な状況のなかでも、人々は詩の朗読会に集い、ロックコンサートを開き、家の聖人のために教会へパンと蠟燭をもって通

っていた。

わたしは日本映画の連続講演を行なうために滞在していた。大学は平屋のプレハブ校舎で、図書館の蔵書などないにも等しいものだった。日本人の常任教師さえいなかった。それでも日本語を専攻する学生たちが十数人存在していた。ベオグラードやザグレブとは違い、講演はしばしば中断された。不意の停電からビデオ装置が作動しなくなるためだ。わたしはあわてて講演の題目を「日本仏教」と切り替え、その場をしのいだりした。

夕方になると、学生が次々とわたしを自宅に招いてくれた。彼女たちの家庭では、原則としてパンもワインも自家製のものだった。ラキヤという、チェリーから作った蒸留酒が決まって出された。これも自家製だった。わたしがうまいという、どの家も帰りしなに1本ずつ瓶をもたせてくれた。そ

の結果、わたしはベオグラードまで、何本もの瓶を担いで帰ることになった。どのラキヤも異なった香り、異なった味がした。

学生たちの誰もが、これからこの町がどの民族に帰属することになるのか、自分たちの身がどうなるのかという問いに答えられなかった。だが彼女たちは日本語と日本文化に強い知的好奇心と憧れを抱いていた。わたしはなんとかそれがいつまでも続いてほしいと祈った。

最後の講義のあとで、ひとりの学生がセルビア語で書かれた俳句を示してくれた。わたしたちは協力して、それを日本の韻律に直してみた。完成した日本語訳は、わたしに未知の、うかがい知れぬ希望の大きさを告げているように思われた。

「わが孔雀の声にて開け天の門」

